

1、地理的方面。

玄奘の擧げた土地と其行程とを地圖に標示せねばならぬとする熱意と努力には敬意を表する。本書に於いて、跋祿迦を Halarikum とし、凌山を Muarat P. として考證してゐるのは、興味深い。しかし群小國名の、如何にも見事な解明は、唐音と現代音との何等かの相似に基礎を置くもの如きも、吾人を説得するに足る積極的證據の見られないのは、最も遺憾とする所である。

2、數量的方面。

著者は印度の國俗踰繕那は小程三十唐里であるとし、従つて地方傳來の踰繕那數を、三十倍したものを玄奘は記してゐると考へる。此の事にしてからが先づ問題であるのに、更に我々にとつて、納得しがたいことは、踰繕那とは、玄奘の所謂「自古聖王一日軍行」であり、土地の習慣や、行路の險夷に據り、一定した長さのない事は、著者自ら云ひながら、現代の「精密なる地圖」に依る圖上の距離を引合に出して一踰繕那の哩數を計算してゐる事である。

以上で本研究の批評をほぼ終つたのであるが、最後に本書下巻への希望を述べて、結論に代へる。即ち、本文の校正を嚴にすると共に、現在に於いて最も完備した考異を附し、著者が好む所に従つて、文字を改變する事は自由なるも、其の據る所を明にして、後進をして過らしめない様にせねばならない。もしかくの如き注意を拂ふとせんか、大正藏經の混淆にして、京大本亦入手し易からず、加ふるに我國流布本の殆ど信を置き難くして、わづかに四部叢刊本、國學基本叢書本を以つて、不便を

しのご現状に於ては、本「研究」の我國文化に貢獻する所以亦明かであると信ずる。

余は此の方面の古地理に關してズアの素人であり、又生來數理に關しても極めて暗い。加へて編輯子は時日を與へるに一週間を以つてした。著者が最も意をそゝいだと思はれる最後の二點を充分に精査して述べる事の出来ないのは極めて残念である。〔松村慈孝〕

北京西郊石景山から漢代の遺物

舊臘以來北京西郊石景山鐵所構内の工事場で、續々古めかしい土器が發掘されてゐたが、今回小野勝年氏の實地調査を得て前漢時代の遺品たることが確認された。

出土品は大部分瓦製の明器で、壺、鼎、鉢等であるが、その多くに博山形の蓋がついてゐることが興味をひき、その他五銖錢、銅製の化粧刷子の柄、内行花文清白鏡の破片なども發見されてゐて、それらは前漢時代の様式を充分にあらはしてゐる。

なほこの他同工事場附近の黄土斷崖から二列の磚壁があらはれ、そこから王莽の「大泉十」二枚が發見されてゐる點よりみて、これは後漢頃の墳墓の羨道に當るものと解され、もしその奥に玄室でも残つてをれば更に興味深いものと今後の調査が期待されてゐる。

北京近郊に於てこの種遺蹟のいまだ學術的調査をへない今日、貴重な資料を提供するものである。(三月十三日付「東亞新報」夕刊より)